



~ 13
3108
3



門へ13
3108
3

三

昭
和
九
年
七
月
二
三
日

昭和九年七月二十三

復讐 奇談 稚枝鳩 卷之三

東都

曲亭馬琴著編

稚枝鳩

第五編

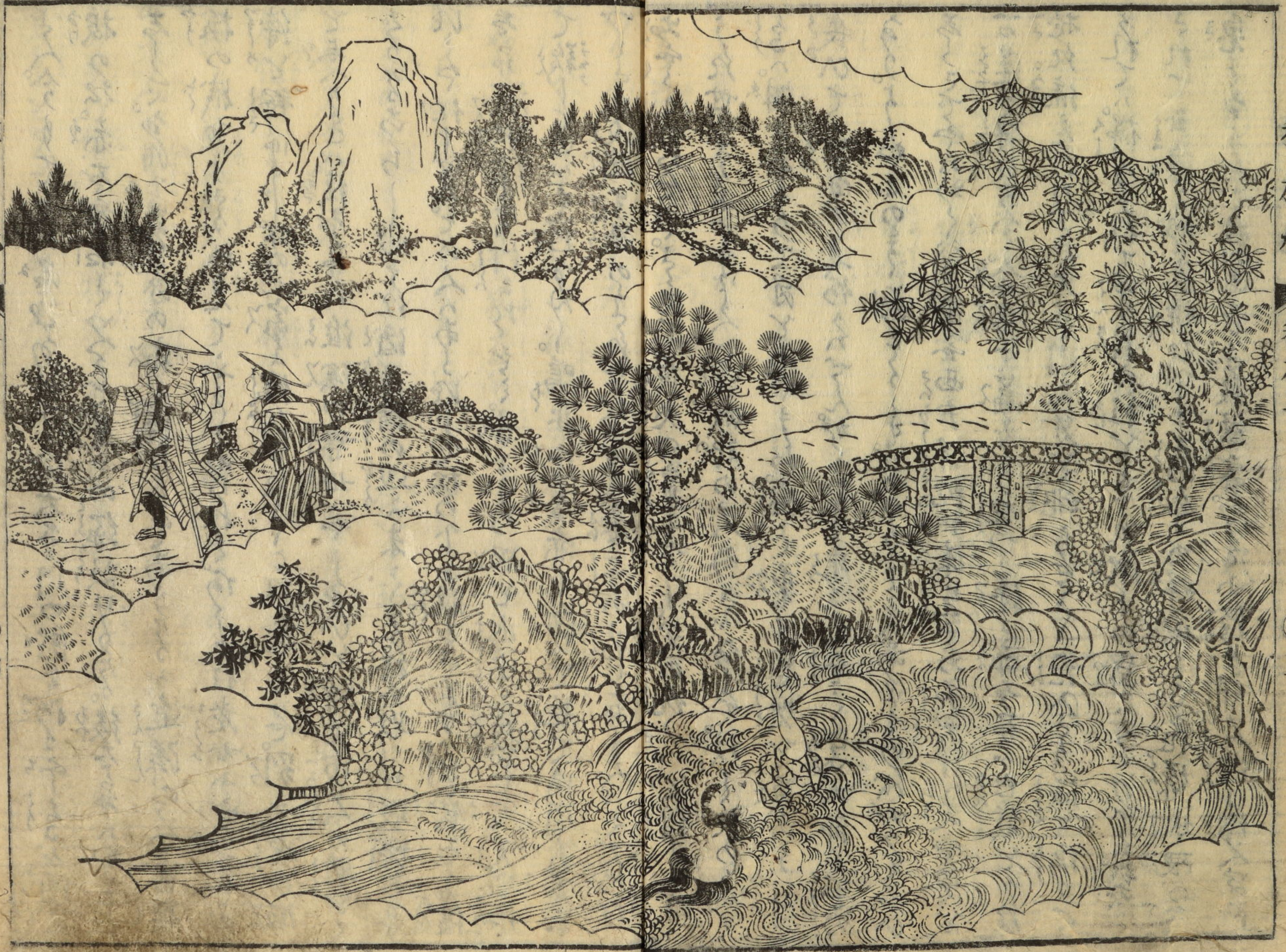
大井川に飢人身と投る
渡月橋に過客又相逢ふ

かくて後を舟に渡月橋とらうらうらうて惟子辻常盤の里ふたどり行か
一軒の家ありく。橋本へよりく建つてゆり。小室くらりりはあり
ふらふらぬべん人の修衣をくく思ひはまはるる程面を走り入て
ひらく。是は長福の流費とらうらうらひ。肌を臨むとらりの形。乾く一
握の飯と旅しあへし。きやふ吸うらり。紙門の裡あ人のさめ
く声をあがらあへく音る人もまればかかるとして味んとす。此
あつ一個の法師と。あつどの老女とあつとさうりお救座のやうな声

稚枝鳩

卷之三

してつらうく。この畜生いふ膽太れば。白晝よ人の物とらんとも
 ぞ。きのよ乾る院夜のうせりもこれか。あめあつべし。彼およこれ
 としてつれまゝして。彼悪僧走るを。夫をよ後を多とおふし。やぞ
 これと縛り。後を多ハ彼ホよ款一がうたまあふねと。今十分肌と
 氣力既におとらん且大さあつ月の一輪の怒りふ人と傷らば。大事
 の中人の小事は係うて。牙と喪ふべし。彼ホ竹のめこととよかさん
 くれ後おつひ鮮べと育ありと。まき慮りて。これとほらとらび。ま
 と来てその縛とらけぬ。このとれ十をみる大舟川の南の岸あり
 なるが。光も異。およは。一とつども。日遮笑え人のこれ。川辺の松陰
 ぶ立りて。夫のうり来るをまら。この二三日はまじく肌と一滴の乳汁
 もお。こととあ。つか。呪の目あ。く。より。ゆた。く。只日産。ま。ん。控。露。お
 あく。虫のぶ。く。さ。か。れ。も。光。着。お。ま。ら。け。く。人。の。病。お。ひ
 たり。もの。ぬ。ま。いて。飢。渴。の。目。久。し。く。れ。ば。赤。を。多。ハ。忽。ち。眼。を。睜。し。
 齒と切りて。けり。く。死。ん。と。泥。子。を。これ。を。え。く。さ。わ。い。う。ま。せ。し。と
 慌忙ども。折。り。し。る。葉。さ。へ。あ。れ。ば。せ。ん。ま。あ。く。て。懐。の中。お。ま。ら。く。抱。き
 ちり。く。好。よ。着。く。唇。の。色。も。う。り。て。終。る。道。の。べ。れ。毒。と。潰。ぬ。あ。さ。ま。う。た
 悲。し。も。強。ん。も。さ。り。く。べ。し。お。ん。と。ま。ま。ば。声。お。び。叫。ん。と。ま。ま。い
 息。ま。れて。その。ま。う。川。辺。は。休。ま。ら。び。な。よ。お。れ。べ。く。ぞ。款。ま。る。借。知。お
 法輪寺。あり。さ。り。る。者。の。光。を。系。と。見。て。あ。る。を。折。心。や。こ。ふ。も。肌。と
 る。人の。心。は。ま。る。し。め。ら。ん。今。若。う。た。う。そ。う。れ。旅。人。の。顔。の。色。は。は
 川。あ。り。も。ま。ま。く。瘦。れ。ま。る。人。さ。り。が。人の。家。よ。入。く。相。を。ん。と。ま。り
 し。紙。登。人。と。ま。り。け。ん。む。志。ん。お。お。擲。く。縛。り。た。あ。れ。今。の。死。う。



今更りてその名むあ〜〜び。大井川の影を掛る千尋が淵に
 投の松赤き石とつらど足との縁故なり。後を歩みかくも
 ありて。あつ下るる家の家傳らまてありたるが。近隣の人の摸
 振の城あ〜〜び紙見てふく〜あられ〜。何〜れ老女小宮てその
 傳と釋ゆ〜。其の家はひゆた〜これと抱くるを。別〜一塊の版
 と与へりま〜。後を歩み淮陰の嫖母や〜あひと得て市人の膝とく
 ぐりたるあ〜。い〜どは渡月橋の辺にま〜く〜。わ〜の晩譯のり
 びとや化〜。その人のあ〜び〜松の下小殿とそ〜りま〜。後
 ちゆ法持〜てけ〜た〜。よ〜り版と水中に投とて天と化
 て歌〜。い〜。己〜。嗚乎千尋。赤き白砂と抱ては川あ〜ま
 づ〜。人間生路の〜とた〜も。妻子のあ〜を〜。我〜

あ〜人と飢渴ま〜。それ又途小識死る〜。う〜世の人の物
 々〜とありてん。む〜。疎讓の空衣と利〜。楠公の湊川は言公遺と
 うや才不肖あ〜て宿志と遂と〜。それ又疎讓が志と擬〜。
 肚〜破りて死〜。あ〜天い〜。れが〜。ま〜。藤子と降〜。
 宮父の死生もあ〜。あ〜。養父の仇〜。替〜。あ〜。世の
 悩のむ死
 させあ〜。う〜。む〜。と〜。腰〜。行囊より。字九尋が
 蓆帽ととりあ〜。刀と抜て〜。す〜。切破り。〜。ち小その刀とさ
 ありて。既あ肚は傳とてん〜。耐〜。もあれ。川上の木蔭より一個
 の老人と車よ。案せ。車紀の十六七と〜。一対の夫婦〜。あ〜。ま〜。が
 この車の儀と命り。傍辺と〜。引あ〜。老人を〜。後を歩み
 せん系と〜。大〜。あ〜。あ〜。と〜。身とあ〜。二人のあ〜

車と引とて忙しく走り去りてカッとする膝小縫りまづその
 縁由と同様の後を尋ねていづく。それいふ事よ追うて自刃するものなり。
 只速お死ありあへんといひつ。又傳してんとされども彼仕伎文ふ
 そのもと放逐してつとく凡そあるものごとく今と措ぬも
 のやんある。さういふ死んと思ふ極めあつた。さういふ死にこそ
 あらわしく公の中へ入るべしとくれ侍。されどすいさく死に
 とうやまづあつた。の由未だおぼゆる。り。能くも死に縁
 あらわしくあつても救ひまわらうとべしといふ。幸うけしとそその云
 不ことうなりなれば後を尋ね固辞よりあつて借りて差さるるがごと
 同のふとふりくつむも後世の漆もなるべし。おぼゆる侍り侍り
 とつひてその身お及腰越の里人除後福六といふのふありしが
 ちるぐの天災は羅りて湯が寄村の九作といふもの小書れて人とか
 づらひ。および九作が二女千鳥と妻して去来男子出せし。九作
 八人のる小書して。その仇と報んとめ。万里の藤原小吟ひて親
 子三人飢渴は迫り。只今ふまが赤を赤と抱てこの川小投し。あ
 そらうり尾みつるまてつとら小物ごりけり。彼三人とれとめてさうを
 いひあつて。おぼゆる。只足呆は呆まらう中も彼老人の東の上より
 物び。或はよ後を尋ね。それこそいふ。父の福六を。初死したる
 ましといひつ。面がらうして又忘れぬ。そそくや。とられ。よく
 親をせし。さし。いふ。後を尋ね。彼と懇然と懇らる。父あつて。其の
 侍あり。杖起も。いふ。さし。来あれ。坐小流先がらう。さういふ。さ
 父が面敷額の皷ふる。来波髪のおらう。ね。おぼゆる。神宮の時雨



く。行歩自在あはれなる世業のいゝものありぬ。これを
車小扛のせむ。彼此と引あはれ。いふも暑とこの川と避く。
昨日の憂と忘す。今家路はゆり時とあれ。命をたぐはる。いと
環り會りてのよらうとさよ。是今く日本念トをたぐはる。いと
親自在大井の舟にまよれりありと。且飲び且るげき一條の
今活祝竭として。日もや西に傾きぬ。後を歩み父がむらりと
て。公の中より驚かたてり。仇人字九郎の。実父の妻の抱きふりて
まがもも見責の因に迹をたぐはる。いと多き茶世の悪縁とて。がらち
ぎりい有りりと。母のそれの悲しきも。月一ツよとねり。若松
ハ母の下世。父の横死。婿が水死のあられさも。ばいし。毎に涙のあはれ
ちとありて。父と母とも。うたまを考ね。ハ夫の悲しきこととて。あ
はれがら。ねえ。あはれ。福六ハ又婿の千も。神祿の末を
が。起るえ。ハ。都。都。都。街。あり。救。さ。り。と。う。み。父
子。り。身。丈。ぬ。の。る。げ。た。小。涙。ハ。玉。碎。の。及。其。も。あ。り。け。只。是。安。常。の
嵐。山。初。花。吹。雪。と。ま。ま。て。哀。傷。秋。の。如。し。この。時。入。相。の。後。ま。え。て。河
鹿。頻。り。小。鳴。り。ま。ま。福。六。を。や。く。ゆ。つ。た。う。は。り。と。終。る。地。も。あ
ら。ど。か。は。細。し。た。い。あ。ら。う。て。こ。そ。ま。り。一。語。り。も。せ。あ。ら。う。ひ。く。
遂。に。後。を。歩。と。伴。ひ。又。車。小。う。ら。の。り。て。常。系。の。里。に。立。え。り。後
妻。事。と。よ。び。物。一。も。あ。り。て。一。子。あ。る。こ。と。知。告。て。後。を。歩。と。引。合。さ。し
り。か。さ。り。ま。ま。ら。そ。の。人。と。え。る。ふ。嚮。は。盗。人。あり。と。て。縛。り。し。藤
人。を。見。ば。且。怒。り。且。耻。て。互。小。い。ふ。と。ま。ま。と。ま。り。に。福。六。ハ。只。九。郎。千
も。赤。衣。が。死。と。あ。ら。れ。大。井。川。より。母子。の。死。骸。と。索。か。し。

縁之檀越ありける田中村の淨蓮寺に蘇已。これが為ふる
 追福を修む。この淨蓮寺の同宿は道玄といふ惡僧あり。原
 小倉山の繁る。慈心精舎の所化ありしが本来破戒の惡僧
 今不ぞ小後めり人もあつて世の穢り所の傍の憤ひ鮮ま
 らかく。近曾田中村の淨蓮寺へ移轉せり。されどこの淨蓮寺
 福六が香花院にてありなれば道玄は勿怪の僥倖とよろこび
 東小虚托てんるにうひ来る。かきめ、密舎して譯をり於
 東あり。福六既ふこのこといふあると人ども。その父廢人となり
 て家よりいふ妻を妻ねされば只ころは合く白地小割さる
 ことあふむ。向は後を所と歩倒して縛るもこの為玄あり。
 この日被惡僧。又田中むしうよりありてかきめと酒りを抱びるら。
 福六父子が後月橋の辺りめて環り舎物をさましてありたるは
 道玄は太井川の夕涼せんとて。印り常葉の里と云ふ所の
 ところよ来る。福六亦が光系の子年あつたりとあやしむ。又中
 のちげふふかくれ居て親子が物がさう一五十一歳をふ。ゆふひ
 福六が家よ走りゆれくかきめ小新と若志せ。その夜淨蓮寺
 小立入りて字九多ふこの事と抱さる。折字九多ふこふかくれ
 居るなと向ひいゆる月九代と歎れ殺しける時。うねる後をさす
 ぬても抱きて立退んとあひら。その為も傷とほされがそのこと
 うみだ。さうしてねく迹のほり。むさうふら。母の事と母かきめ
 小告りけむ。おさめたるをさす。その時彼が察し匿かく。この回

唯支集

卷之三

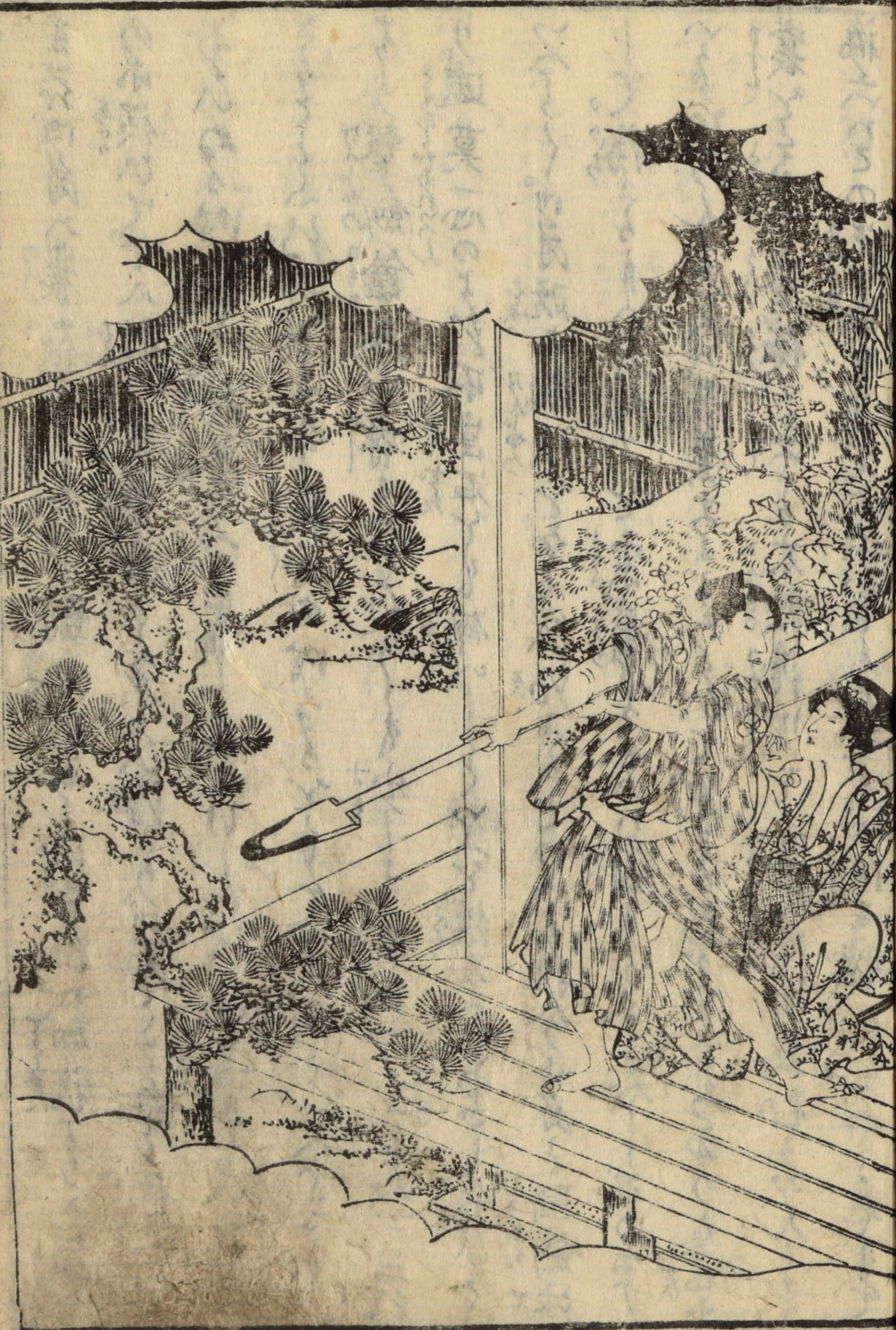
九

中村ハ神乐屋の西北ニありて下岩縁よりハ洛外東西ニ
是乃の祓も近々ねハ福六具香亦もふふこのことハ
夜字九多ハ及玄がそのうらハ孤波堂と拵て大よ
又あることハ存云ハ肉姐の臭控下の虫の如ク
後の憲と除へしとひて二人潜ニ謀と謀一合せりり。

第六編

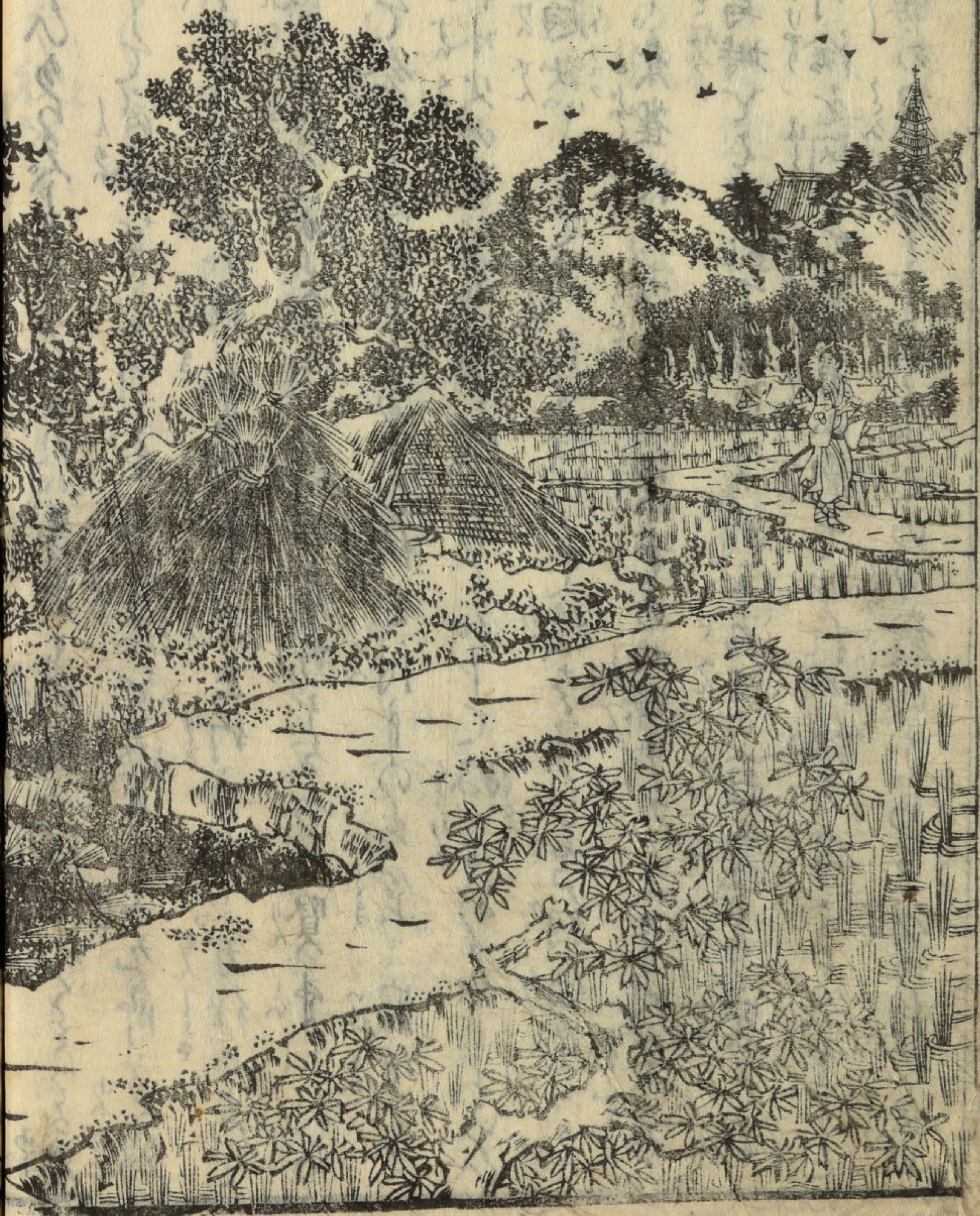
カミ膠一後母晚兎と謀る
棺と成て孝子雷公と伐取

儀者命ハかることともあるとど継母おしあが
も仇人の名ハあるとど只黒雲よれと字九多
おさめたる玄がをめてるよりこの事とあると
かきだ。お化すありてあそゆりるを及教よ
これハ儀者命松木ハ形勢と出あてり。日毎
せりり。一日儀者命ハ父が主人ハ支せて
よりいこのの劬勞とけなり。今ゆるり
ハさぐは傍よけりて孝者と竭一なる
ありむく不いふおもあぐ。今日より
仇と報ひけりて。今ハ松ハ隣屋ありて
かりく福六がまハ死して。それが
とゆくとんもれががぐくふありと
づたぬるれども。今儀者命ハ死
まりりて冥父の仇と報ひけりて。今
言をゆてとて。この事変一て不可
○ヨカラズ



と戮あて。箇くわ根こんくはさくさくひあへといひれば。道どうまこの謀まう妙めうあり
と稱しょう贊さん。亦また踵かかととめぐるして。さらば後ご達たつさへそりくるわこの
夜よ後ごを昂あがりが首くび途とと祝いわして。留とど別べつの酒さけ宴えんと張ま父ふ子こ兄弟あにあつたれと
惜あはして夜よの深ふかとあつた。がさめらひまはさふ後ごを昂あがりが両ふた刀たと偷ぬす出でし
く祝いわて准じゆん備びやあつたりり。膠か松しょう脂じと湯ゆのごとく沸わけおれた。これ
と刀たの鞘さやみつぎも。白や刃ばと鞘さやおさめてゆき。びえのともろ。裁きおれた
るどあつりの更さらあつたりり。既すで八や声せいの雞とりの音ねあえて。夜よ向むか明あしと
と。後ごを昂あがりハ父ふ母ぼ妹いと辞い別べつ。遂ついは家いえとらあつたり。万ま里りの旗はた後ご
を昂あがりたる。果はまはる。西さい院いん村むらの辺へりまで送かりあつたりと後ご
を昂あがり志しをく。とあつたり。づが地ちまで行いくも別べつにおあつたり。け
と。びとめく。杖つゑとさうらべ。賢けん弟ていと倫りん業ぎやうとつとあつたり。老らう

父ちちとや。さるひのり。ぐとつひりれば。果はまはる。両ふた眼まなこお涙なみだとふく。さる
より。自みづかをくして。命いのちとさうら。さる。宿しゆく志しと遂ついは人ひと字じ九く所じよを免ま彈だん
ハ。今いま西さい園えんありと。父ふ母ぼ妹いハ仇あだ人も被か知しる。遂ついは行いく。万ま緒じゆとらと
りらひて。被か未ま又また欺あざむき。あつたり。つ。後ごを昂あがりあつたり。賢けん弟ていこれら
の事こととめて。念ねんとあつたり。あつたり。仇あだと討うちのた。皆みな又また寢ね戈がを
枕まくらと。これ水みづ火かの中なかと。辞いせ。日ひあつたり。て。好こう喜きあつたり。とつひ
後ごり。遂ついは。趨たす然ぜんとして。別べつ去さり。が。後ごを昂あがりあつたり。羽う休しゆ見けんのさ
と。さうら。東とう雀さく村むらもあつたり。東とう寺じの四し塚づかまで。来きり。時とき。東とう本ほんや
あつたり。群ぐん鳥とり時ときと。あつたり。噪なり。時とき。右みぎ辺への藪やぶ蔭かげより。字じ九く所じよ
あつたり。竹たけ滄そうを。岡おかして。暮くれ直ちくふ。樹じゆて。か。後ごを昂あがりあつたり。え。さうらと
飛とと。腰こしの刀たと。抜ひくと。さうら。この刀た鞘さやの。さうら。牙はつた。て。文ぶんに



抜ど。こいりふと焦燥て。又中刀とぬんとそれかこれ人抜ど。後海
 たり。忙て。なけちうと極てぬんとさうとた字九多走りり。後を
 多分臑と脚せめて。衝さむさむ。後を多分さく。その竹槍とさうり。せ。
 引組てよふなり。トよあり。二人逆小原田の中へまらび。墮全身泥ま
 まさく。を遠自在あ。この時及玄又及竹の蔭より。跳り出。字九多小
 カと合せん。と翔まかれ。と泥ふく。して。涉りゆ。とあ。この間口
 かりける。獨木橋と倒け。や。その上とあ。中々。行。た。後を多分。既小
 字九多。と。門。伏。て。腰。の。刀。と。棄。ん。と。さ。う。を。棄。ま。し。と。ま。と。あ。や。り。
 その。乃。及。云。い。後。より。後。を。多。分。が。髪。と。う。相。て。の。け。さ。ふ。小。引。え。び。
 字。九。多。を。祢。起。て。胸。膈。と。あ。く。り。刺。さ。れ。て。後。を。多。分。か。し。撲。む。
 と。と。ろ。と。さ。い。と。さ。く。け。く。切。か。ぶ。ふ。及。玄。や。が。其。首。と。う。た。落。し。後。

又懐中の路根と棄ひとろ。二人うらうらうと。深田の中うらうと。ひ上。う。田
 氣の流。又尾と引。と。蹄。と。く。ま。う。一。逆。去。り。り。鳴。平。痛。い。う。後。
 右所。継母の毒。子。小。隔。して。仇。人。の。あ。ふ。及。殺。せ。れ。月。の。四。隊。乃。朝。
 路。と。消。ぬ。鼻。香。い。か。る。凶。事。あ。り。と。ま。う。で。る。後。後。と。顧。つ。る。
 六七町。さ。う。う。り。り。が。前。面。の。田。畔。お。肉。味。と。先。り。の。あ。り。朽。さ。る。株。の。実。
 う。彼。誰。時。の。味。爽。ま。つ。く。と。れ。と。又。ま。は。後。を。多。分。が。火。打。袋。あ。り。り。
 旅。を。必。用。の。り。の。ど。う。い。ま。い。を。さ。く。い。ゆ。れ。あ。い。ど。追。蒐。て。これ。ま。の。と。
 へ。と。む。う。り。こ。ち。又。ち。と。引。え。て。糸。雀。の。う。と。人。を。行。り。り。この。時。後。の
 既。明。と。な。れ。下。を。名。家。う。編。り。起。出。て。中。原。を。着。終。し。早。飯。を。え
 て。あ。れ。ど。号。を。い。ま。と。ゆ。り。来。だ。づ。ら。ま。で。送。り。り。ん。体。見。ま。せ。り。よ
 も。中。う。と。く。ゆ。れ。う。と。ま。と。号。して。あ。り。け。り。と。ま。う。へ。糸。雀。深。く。後。

惟支鳩

新本九

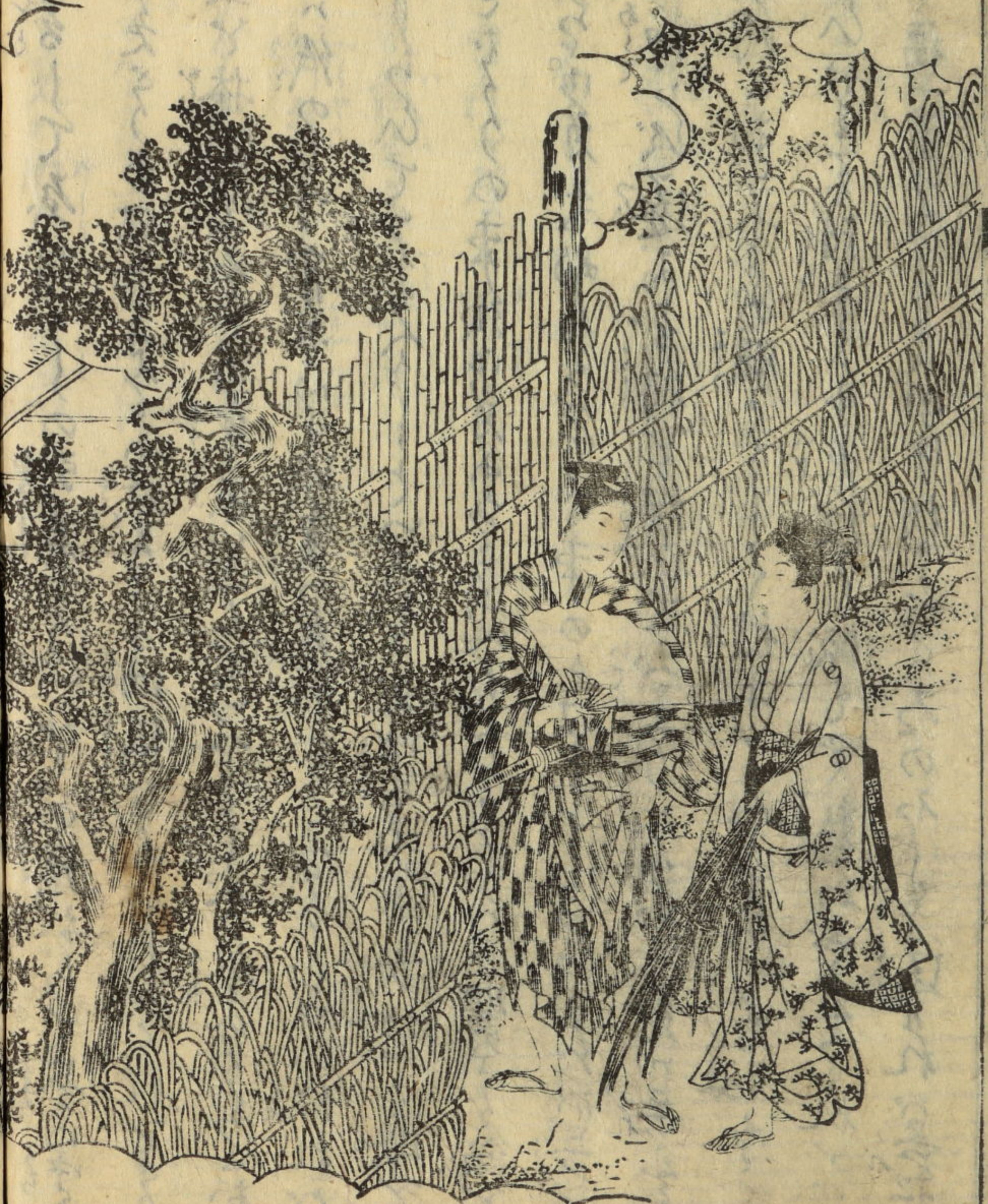
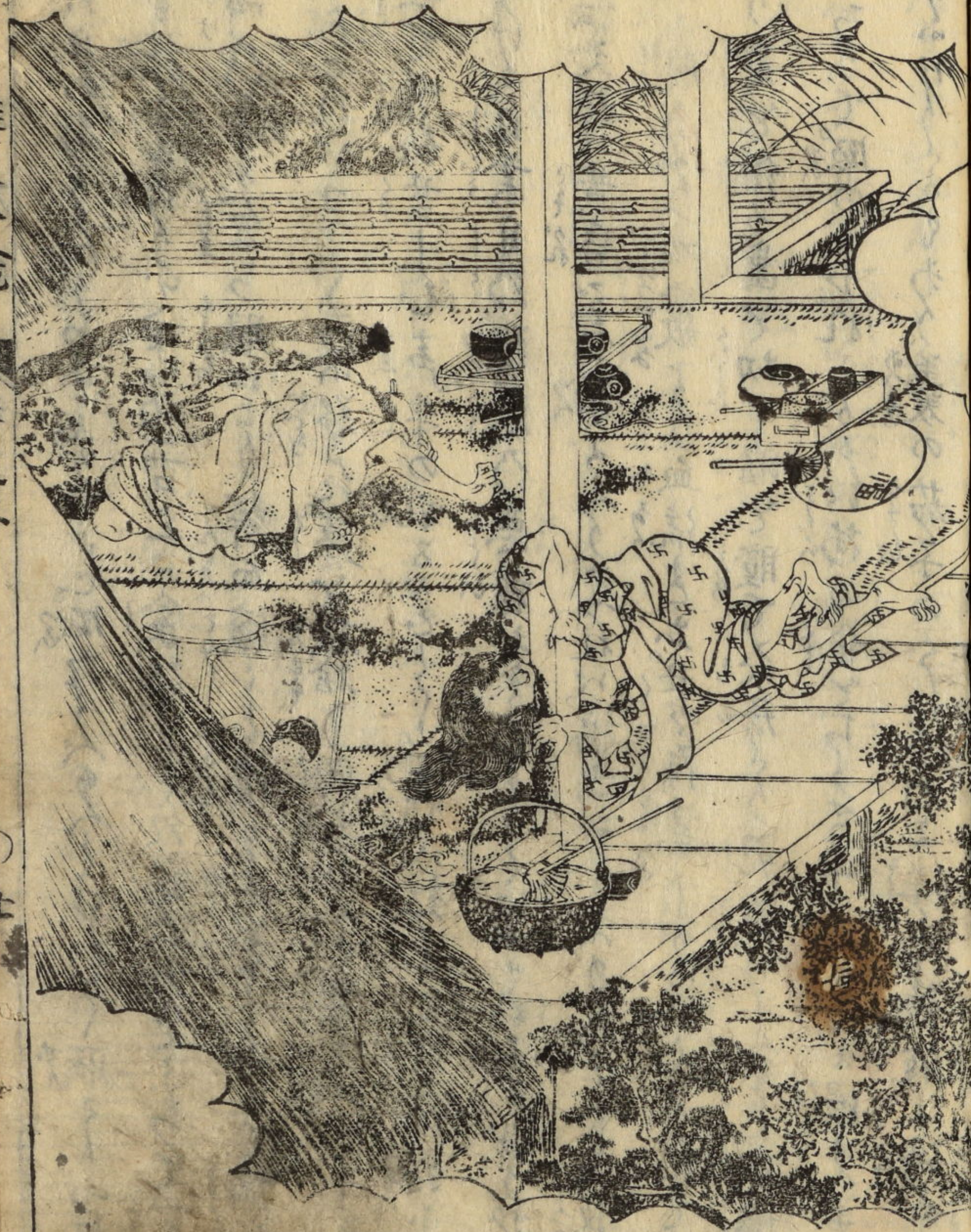
十六

ちりぢりな殿と竹葉と紅のせて号松ありくろくまれの園完これ
 とりて沸ぎごとく。福六の依つまらびつねいまどい。哭啼て措不と
 ありとがとはい痞成かうて隠る人奉え孫が。おとりのことととられ
 一けれど。笑とくくして死骸よりつね。狼のやうな声してそと
 と。葬式のまじりてても。ひと日二日の徒ふるだぬ号松ハ兄が刀さ
 へ抜合せに殺し船の傷とけて死しとてぶうーられが。おそふその
 両刀とあつらひ檢ふ。抜るもことよりさう。輪のうらめを膠松脂と
 つたててこれば。さうに核密をやく。漬て。アが兄。継母小忻ま。字九島が
 為小母。れめいぬい。まうらうらう。いま。言も出さじ。福六も刀のぬけ
 びらとあやしく。懐を帯が横死の板。ハられく。あうらう。神七日も
 ともかこれと知縣は。縛て。だれめんと。と罵る。おとりのこれとて

密計のあつたこととさうと。怖害を燒香に假托し。淨慈寺小をり行
 乃玄小あひてこのことと。いふと。いふと。いふと。乃玄。皆のあつた
 後。いづく。このより。更ふ。怖る。小。は。字九島。の。四。隊。より。直
 又津の園。乃。く。人。お。う。ね。又。う。が。寺。は。帯。代。の。毒。石。あり。拵。この。毒。葉
 いた。う。長。祿。年。中。南。亦。國。より。蒼。白。の。藥。石。と。貞。う。く。小。義。政
 公。後。世。野。か。の。り。れ。あ。う。た。この。毒。と。り。て。人。命。と。傷。ら。ん。て。成。慮。り。
 これと。常。寺。小。附。与。あ。ひ。て。今。う。の。宝。藏。ふ。か。さ。い。これ。これ。を。と
 登。り。り。て。ま。い。り。ま。い。り。山。内。密。小。この。毒。葉。と。り。て。彼。木。と。鹿。鹿。小
 あり。人。是。根。と。う。ら。系。と。拵。う。た。の。保。ら。う。と。さ。さ。れ。り。れ。が。あ
 いた。れ。菌。莖。と。あ。う。り。さ。う。町。と。い。ま。い。れ。又。活。り。と。さ。う。と
 ひ。う。が。あ。う。り。て。乃。玄。が。お。と。り。と。待。次。の。目。乃。玄。ハ。室。を。め。ま。あ

のび入く毒石と缺し。傍ありけ。傘と引裂きてこれと畏
 逐は懐は挾て下暖減よを行り。三糸の摺よりちりちりして六
 角堂のけりし身を束ぬる時。及云く。慌て小石を踏た。勿ら撲
 地と倒れ。彼毒菜の包紙懐中よりひりりし。墮れ。一隻の
 鷲。真の肉とや。人ん。ごう。まて。この毒菜と云。相。虚
 空遙々花あられ。及云愕然。し。ち。移。た。の。逃。ふ。も。心。を。ま。う
 れ。小。り。し。紙。の。糸。の。風。ふ。ま。れ。ら。あ。ら。し。て。号。叫。呼。眼。と。そ
 ら。さ。ま。あ。一。脚。然。し。て。追。蒐。し。り。この日福。子。あ。る。懐。ち。あ。が。七
 日の速夜。あり。れ。が。お。さ。え。ゆ。一。束。打。ち。て。服。を。ら。人。に。号。私。お。と
 る。群。境。せん。て。喪。服。を。着。ひ。て。支。か。ん。し。す。時。服。や。し。や。く。亭。心
 あ。れ。ば。お。さ。え。の。服。の。蓋。と。う。て。ご。一。瓶。し。し。け。ら。忽。ち。た

ら。く。と。考。して。包。根。う。の。引。窓。より。一。巾。の。紙。お。ら。て。今。の。中。の
 ぐ。ね。お。さ。え。さ。う。あ。げ。し。く。ん。の。敗。ま。る。油。紙。な。り。け。れ。ば。これ。と。り
 捨て。又。蓋。と。揃。ふ。号。虫。この。光。系。と。う。て。つ。う。く。今。登。の。う。ら。み。お
 ち。う。ら。み。紙。の。も。り。音。ふ。け。い。紙。食。の。者。の。り。と。あり。と。い。ゆ。れ。ば
 う。い。ん。と。い。ら。ひ。て。つ。ん。あ。う。し。と。い。ふ。お。さ。え。は。あ。ん。を。勃。然。と。眼。と
 瞑。ら。し。さ。な。り。の。束。紙。の。身。あ。ら。う。べ。れ。え。ら。う。ん。が。響。く。と。飯。と
 あ。し。と。あ。ら。ゆ。身。ま。め。ら。ら。でも。事。の。う。け。ま。し。と。い。れ。ま。れ。は。号。私
 ハ。口。と。引。て。淨。い。は。遂。よ。き。好。と。付。ひ。て。出。ま。り。り。り。お。さ。え。の。号。私
 が。ま。れ。は。け。は。あ。ら。う。の。腹。と。い。く。彼。ホ。が。う。ら。ま。て。も。あ。ら。う。と
 ト。と。思。ひ。け。し。を。好。し。し。め。急。だ。く。服。も。中。熱。ぬ。や。そ。これ。と。い
 佛。お。た。く。福。十。う。ら。り。田。中。村。ま。で。ら。の。や。ど。も。遠。れ。ば。号。私



赤い目のわらんうらふえうらじ。吸たふのへんといひく膳うつけおの
 きも後よとらりてまぬ二口之口食ひたるを福六胸とらりて一声咳
 と叫びらるが。忽ち眼口より鮮血液と漬り。足とふふと悩れを
 おさめこれとつらうたふ驚れ箸と投捨く立上らんとせしが。暫く血
 と吐て叫び苦しむ声牛の乳るがごとく。七粒八起してねひ死小ぞ死
 うらける。自業自得。隱悪乃悪報。おそろしうもかろく。びて
 早松まゆの黄昏でう家よるうまれば。福六おさ免りうも小肢體
 は柔小腫あがり九穴敷より血流と出。其苦痛甚しうりしとええて。血
 握り足と縮め。齒と切て。腫と腫て死居らう死骸のまへに盃盤と
 まらりて。吸めこむれらるが。紅梅の舎とらうせし。血は浸りて大き
 やうなうらうらもわら。羨羨の茄子のうれるおよ。梅液は漬らるが。

とれもありて。まうと変死とええられ。夫婦大まおらう死悲く。近隣に
 告あせうと。夏之形勢と訴られ。執柄三好純前守長慶が。家臣甚野
 丹下。う小あうて。檢案し。このうらうらと。おひあはれることありや。同吳
 松夫婦のあうて。疑し。あふことうと。つども。嚮は浄蓮寺に。精んとせ
 一時。一知の紙引窓の上より。落ちて釜の中へ入らう。このおら
 乃事。あまわらうを。考ると。うらうらと。昔も。丹下つと。うは。是
 と。まうと。つらう。先お釜の中へ。おち入らう。紙あす。う。これと。えて
 折断せん。と。命と。命と。命と。号松と。うら。竈のやう。彼油
 紙と。索あうて。これと。丹下。お進つ。丹下。これと。つら。これ傘のやう
 紙と。浄蓮の二字あり。且く。沈今と。う。是。これ。浄蓮寺の
 傘と。引裂らる。の。あり。彼。あ。むら。うら。船。毒。石。あり。と。

うついでにわづらひ。定めて探訪ありとせられた。まが彼知と礼回とべー。さう
 解るところあり。翌こそ定めとつひさう。遂に僕後と得てうらさぬ。
 さうお放て号松夫婦は。うらまへて哀哭の声と悲涙。その夜をぐう。櫃と
 まりりて。明日正午は野邊あつりと定む。この時津蓮寺の住持ハ龍
 澤和尚とて。道高松智の聖とておる。この寺ハ来久しく
 畜る花猫ありたり。一夜個猫和尚の枕よふ来くつう。ゆきしき。寺
 の書齋とゆく。竹うが。燈台ハ牙の傍俵ありて昇天。火又とまり竹
 あり。後いさる事ありとも。普門品を讀誦し。あふるこのまやさんとも。
 目ハ来來の心思も謝し。なるとく。咽喉をまみりぬと。いふとあふ
 着見えぬ。和尚怪有の来お井りひて。後猫と索ありよ。そのゆへ方
 とあつざれば。いふく怪みあふとも。福六夫婦の送葬今日正午

と告ふれば。和尚ハともなから轎よ乗り。福六が家よりつりて亡者と逢
 へ。改小時刻もあつぬ。この日ハ才熊のそあく。残暑お小烈し。お
 ニッの檜柳三条大橋とあつたり。加茂川奈よとひてゆりく。吉田の
 表もえあつとも。天油然と結陰大雨俄頃。小降来りて。雷電をたり
 小鳴りたり。今や改のうよ落くるべく。ええられた。人々も戦慄。櫃
 と解く。東西は逃まじふ。されども号松ハ。お怖く。氣をあら。おハ
 只濡れ小ぬまきあつ。左文字の力乃反うらうけ。雲間と睨とて。立居と
 了。雷雨まじく。烈し。され。龍沃和島も轎裡より。立出。ゆり。法衣の
 袖と袂あげ。数珠お。して。續経。あ。時よ。二乃木の。黒。免
 が櫃の上よ。さ。門か。さ。へ。が。雷鳴。一声。て。檜柳。あり。く。壞
 也。空中。物あり。て。お。さ。免。が。死。骸。と。い。わ。げ。ん。と。さ。う。と。黒。松

